

第27回

浴室分散と個別化

近畿大学 建築学部
准教授 山口 健太郎



【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て2008年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011年4月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

先月号では誘導から入浴、そして誘導までを一人の職員が担うマンツーマン入浴の効果について述べた。本稿ではマンツーマン入浴を実現するためのハードについて解説する。マンツーマン入浴を実施するためには下記の3つの要件を満たす建物であることが望ましい。

- ①浴室が施設内に分散配置されていること。
- ②1人の利用者と職員に適した広さの浴室・脱衣室であること。
- ③多様な身体機能の人が利用できるユニバーサルデザインの浴槽であること。

1) 浴室分散—浴室が施設内に分散配置されていること—

マンツーマン入浴は質の高い入浴を実現できる一方で、流れ作業介助に比べてやや時間がかかる。高齢者施設の入浴時間は14時～16時の2時間程度が多く、時間内に終わらせなければ他の介助時間を圧迫することになる。マンツーマン入浴においても業務の効率化は必要となる。誘導、着脱、入浴という入浴プロセスの中で誘導は、入浴とは直接関係のない行為であり、動線の短縮化は誘導の効率化につながる。動線を短縮化させるためには居室や食堂と浴室の距離を縮める必要があり、1箇所で大規模な浴室を設けるよりも小規模な浴室を分散して配置した方が総体的な動線距離は短くなる。個室ユニット型施設では、浴室を分散して配置し、概ね各ユニットに1室の浴室が用意されている。ユニット型施設は居室や食堂から浴室までの距離が短く、マンツーマン入浴を実践するのに適した空間であると言える。

2) 浴室の個室化—1人の利用者と職員に適した広さの浴室・脱衣室—

流れ作業介助は多人数の入居者を集めて介助を行うため、空間も人数に応じて大規模となる。和気あいあいと入る温泉に比べて、各々に介助を伴う施設での入浴は他人に見られたくない。大空間での介助はプライバシーや羞恥心を損なう。また、男女が混合しないようにするためには時間管理が必要となり、入浴スケジュールを組む手間がかかる。加えて大きな空間は暖まりにくく寒い。マンツーマン入浴では、脱衣室・浴室内に同時に滞在するのは介護職員 1 名と利用者 1 名の 2 名のみであり、大きな空間は必要ない。一人ずつで入るためプライバシーは保護され、男女のスケジュール管理を行う必要もない。だが、小さすぎると新たな問題が生じる。ユニット型施設のハードには、家庭的な雰囲気求められるが、一般家庭用サイズの浴室では使いづらい。高齢者施設の利用者は身体に何らかの障がいを持っている人が多く、家庭用サイズの浴室では自立した入浴が困難となり、介護負担も大きくなる。自立した入浴を支えるためには手すり等が必要であり、介護負担を軽減するためには浴槽の側方や後方に介助スペースを要する。さらに、自立での入浴が困難になった場合にはリフトやいす昇降機付きの浴槽の設置が必要となる。施設における浴室はこれらの介助スペースや設備機器に応じたものでなければならない。浴室の必要面積は浴槽ごとに異なるが浴室、脱衣室ともに 3m×3mのスペースが確保されているとよい。ほぼ全てのいす昇降式浴槽に対応でき、浴槽のみを設置してもそれほど広く感じない。

3) ユニバーサルデザインの浴槽

上記 1) に関連してユニット型施設において動線の短縮化がなされるのはユニット内の浴槽を利用した場合である。ユニット内の浴槽が利用者にあっている場合は良いが、そうでない場合は他のユニット、または、施設内の別の場所の浴室を利用する事となる。ユニット内の浴槽がユニットの利用者全員に対応していなければ、遠い場所にある浴室を利用せざるをえなくなりマンツーマン入浴を実施しにくくなる。つまり、浴槽には誰でも使えるという「ユニバーサルデザイン」が求められている。

従来の流れ作業介助では、一つの空間に複数の浴槽を設置できるため「歩行可能な人向けの大浴槽や個別浴槽」、「車いす利用者向けのチェアインバス」、「座位保持が困難な人向けの臥位式浴槽」というように身体機能別につくられてきた。このような対象者を限定した浴槽は浴室分散を前提としたユニット型施設には適していない。近年はユニットケアの流れを受けてユニバーサルデザインに近い浴槽が販売されてきている。浴槽を設定するときには軽度から重度の人まで幅広い人が利用できる機種を選んでもらいたい。